



Title	ベーム倫理思想の研究
Author(s)	福島, 正彦
Citation	大阪大学, 1982, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33414
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【2】

氏名・(本籍)	福 ^{ふく} 島 ^{しま} 正 ^{まさ} 彦 ^{ひこ}
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	第 5 8 2 2 号
学位授与の日付	昭和 57 年 11 月 1 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	ベーメ倫理思想の研究
論文審査委員	(主査) 教授 岸 畑 豊
	(副査) 教授 三 輪 正 教授 高橋 昭二

論 文 内 容 の 要 旨

ドイツの著名な神秘主義者ヤーコプ・ベーメ(Jacob Boehme, 1575—1624)はドイツ哲学の源流として、西欧では広く研究されているが、わが国では最近に至るまでほとんど見るべき研究成果がないのが現状である。

本論文の筆者は早くからベーメの神秘主義思想の研究を始め、自ら収集した様々な資料を活用して研究の成果を逐次発表してきたが、これらの集大成として書下されたのが本論文である。その構成は、本論文の意図と方法が示された序言、ベーメの神秘主義思想の背景と成立過程の詳細な追跡がなされた第一部、その特質について論ぜられた第二部、および筆者のベーメ解釈の核心が述べられた結語からなり、末尾に引用文献表がつけられている。本論文の内容は以下のとおりである。

序言 ベーメの神秘主義思想は多くの人々によって高く評価されてきたが、彼の独自性と特質がどこに見出さるべきかという基本問題に関しては、諸家の見解が容易に一致せず、いまだに定説というべきものがない状態である。本論文の意図は勿論この基本問題の解明であるが、一言でいえば、筆者は実践的性格をもつ内面的神秘説に神秘主義思想の特質を見出そうとするのである。この意図を達成するために次の二つの方法が定立される。第一の方法は、単に著作に述べられた思想によるだけでなく、彼自身の書簡、同時代の人々の証言、彼の居住したゲルリッツ市の公の記録などにより、彼の実生活の経過を追跡して、思想の背景と、著作の成立過程から神秘主義思想の真髄を解明することを眼目とする。第二の方法は、ベーメの難解な思想の特質を具体的な様相において理解するために、著名なベーメ研究者ベルジャーエフのベーメ論を手掛りに、ドストエフスキー文学にみられる現代の人間の内面的意識の問題とのかかわりにおいて比較検討すること、あるいはベーメを高く評価し、その影

響を強く受けたシェリングの哲学、およびノヴァーリスの作品との比較においてペーメの特質に迫ることを目指す。

本論第一部 「ペーメ倫理思想の背景—その生涯と内面的神秘説」 序言で示された第一の方法を適用して、ペーメの内面的神秘説をその背景と成立過程から解明することが第一部の課題である。

第一章 「内面的神秘説の萌芽—処女作以前」 処女作『黎明』Auroraが現われる以前の幼年期から徒弟時代、遍歴時代、靴匠としての独立と結婚、長男の誕生の年までをふくむ時期がとりあつかわれる。彼はこの間に様々ないわゆる神秘的体験をしたと伝記に記されている。とくにいわゆる錫器体験は有名であるが、これらの諸体験の意味は、やがて自覚されてくる内面的神秘説の前兆ともいえるべき象徴と解され、この年代でのこの説の成立過程が実生活の中で実証的に追跡される。

第二章 「内面的神秘説の成立—処女作誕生」 『黎明』（1610）はペーメの内面的神秘説の自覚の表明とされるのであるが、当時の彼の心的状況を示すものとして次の点が注目される。すなわち宗教改革後の動乱、および三十年戦争前夜のゲルリッツ地方の混乱を直接体験したペーメの苦悶の深さ（いわゆるメランコリー）と、この苦悶から救済への心的転換の可能性の模索、そして内面的神秘説に至った彼の大きな喜びが素朴な表現によって綴られたもの、これが処女作の意義である。

第三章 「内面的神秘説の成熟—処女作以降」 『黎明』発表以降その死に至るまでのペーメの後半生は、内面的神秘説の成熟とその証の過程としてとらえられる。処女作発表はゲルリッツ市の教会の首席牧師リヒターの中傷と迫害をまねき、ペーメは6年間の沈黙を余儀なくされたが、『キリストへの道』（1624）の発表に至るまであいついで多くの著作が書かれた。このことが再び首席牧師を激怒させ、ペーメはついに故郷を追われ、妻子と別れて零落せざるをえなかった。しかし彼は自己の思想を成熟させるための試練としてこの迫害を受けとめたのである。『キリストへの道』で示された「我意の否定」の実践的修練と、「魂の内奥における神の生誕」との本質的連関という内面的神秘説の真髄はこのことによって実践的な証をえたといえよう。

第二部 「ペーメ倫理思想の特質—「無底」との関連よりみた」 その生涯において様々な混乱と暴虐、そして迫害など諸々の悪を体験したペーメにとって、倫理的基本問題は積極的な事実としての悪からの魂の救済の問題であった。神秘主義者として彼がゆきついたところは「無底」Ungrundの思想であり、ここに彼の特質が見出される。これを具体的に解明するために第二の方法が適用され、以下の点が検討される。

第一章 「無底について」 まずペーメの「無底」の意味が彼自身の言葉から明らかにされ、一言でいえば、善悪二元の対立以前の、さらに神の創造そのものの根源に想定される一元的根底としてとらえ

られる。「無底」における無と有とのかかわり、「無底」の働きの時間的非連続性、突如性、およびこれから生ずる戦慄と歓喜という心的作用の両極の様相が、ドストエフスキーの『罪と罰』を手掛りとして、現代の人間の問題点とのかかわりで理解される。

第二章 「人間、神性、自由」 このような心的作用の両極の様相が人間、神性、自由の問題にまで拡大されて考察される。人間の本性とは何か。人間は神とどのようにかわるか。人間にとって自由の意味と成立根拠は何か。これらの倫理の基本問題がバームの見解との対比で、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』などを素材として検討される。

第三章 「無底の愛と浪漫的憧憬」 バームを高く評価し、「無底」の概念を継承したシェリングの『人間的自由論』における「無底」の意味とバーム自身の見解との共通点が具体的に指摘され、これによって難解な「無底」の概念の、いわゆる弁証論としての愛の動的弁証法的性格が明らかにされる。ついでシェリングと同時代に浪漫主義的立場からバームにひかれ、その神秘説を詩的作品にとり入れたノヴァーリスとバームの共通点が考察される。両者が共に清浄無垢な神性に憧れ、不死なるものとの霊的合一、脆弱性の超克が求められたことが指摘され、いわゆる内面的神秘説の神性の基本的性格が解明される。

第四章 「善の問題—総て善しについて」 C・ウイルソンによれば、バームには「総て善し」として、総ての事柄を肯定しようとする心情があるといわれるが、その意味が検討される。バームにとって現実の世界は葛藤と相剋の場であり、自然界も人間社会も果てしなき対立と闘争の世界である。これを「総て善し」として肯定することは、もとより現実の諸悪をそのまま承認することではない。彼自身に襲いかかるあらゆる苦難、そして最後には零落のうちの彼の死をも含めて、一切を平静な心で受容しようとする態度が「総て善し」と表明されたのである。これは彼の内面的神秘説の重要な特質である「我意の否定」というきびしい実践的修練に裏打ちされた魂の神性との合一の表白であり、死期の迫ったバーム自身の心境であった。

結語 宗教改革の後、三十年戦争の前夜およびその初期に生きたバームは、自己をとりまく外的世界のうちに恐るべき暴虐と闘争とを見た。ゲルリッツ市の一介の靴匠にすぎなかった彼は、この世界の諸悪に直面してまさに戦慄し、途方にくれて立ちすくんだのである。彼は強度の無力感とメランコリーに沈んだだけでなく、重い罪悪感にとらえられた。なぜなら彼が目撃し、恐れおののいた非情の世界に彼自身も生きていたからである。彼はメランコリーからの脱却と救済とを求めた。しかし無力な靴匠に辛じて出来たことは、目を外界から転じて自己の内面に向けることであり、心の内奥にいかなる罪悪や憎悪によっても汚されない純粋な神性を見出すことであった。この内面的神秘説を大胆に表明した彼は異端者の宣告を受け、迫害された。しかし魂の内奥に清浄な神性を求めたバームは、あらゆる苦難を我意の否定としての自己錬磨と自己浄化のための試練として受容し、平静な態度を失わなかった。戦慄にはじまり、受容をもって結ばれるバームの倫理思想は、彼の生涯が示すように、内

面的神秘説の自覚と実践的な証の道程であったといふことができる。

論文の審査結果の要旨

最初にふれたように、わが国でのベーム研究はいまだに見るべき成果がほとんどない状態にある。西欧にくらべれば、一般に神秘主義思想研究は低調といわざるをえないが、とりわけベームの著作の難解であることがその原因の一つであろう。筆者のベーム研究は、わが国ではいわば先駆者的であるといつてよい。このような未開拓の対象の研究にとって重要な事柄は、研究の方法の定立とその有効な適用である。本論文はその序言において二つの方法を提示し、本論においてこれを適用したのである。したがって本論文の意義と特色はこの点に見出されるのであって、審査もここに重点がおかれた。

第一の方法はベームの思想を解明するために、単にその著作ばかりでなく、彼の実生活そのもののうちにその背景と成立過程を実証的に追跡することであつた。僧院や書齋で冥想する学者ではなく、市井の一職人として実生活の中で体験をとおして思想を感得し、苦難と戦いつつ実践的修練のうちにこれを深めてゆくベームの神秘説を解明するには、この方法は必要欠くべからざるものであり、有効であるといえる。なぜならば、彼の著作に示された思想は神秘的体験によって感得された彼の心奥にある真髓の象徴的表現であるから、著作にだけ頼るならば、いきおい多様な解釈を生み、決定的な定説に至ることは困難であり、思想を生む背景と成立過程を含む生涯についての実証的研究方法こそ前提とならねばならないからである。筆者が利用しうるかぎりの資料を駆使して、この方法を厳密に適用した成果が本論第一部であつて、わが国では初めてともいえる研究成果であり、いわば先駆者的業績として学界への貢献は大きく、高く評価されてよいであろう。

筆者はベームの著作の難解であることを考慮して、その特質を明らかにするために第二の方法をとつた。すなわちベルジャーエフとウイルソンのベーム論や、シェリング、ノヴァーリスを手掛りにそれぞれの論点、または共通の概念を検討することによって、晦渋なベームの思想をより近い時代に関連させて、比較的理解しやすい具体的様相においてとらえようとしたのである。この方法の適用による成果は論文内容の要旨において記述されているとおりであつて、それぞれの論点や概念についての筆者の論述はベームの思想のそれぞれの側面を具体的に明らかにしているといえよう。

しかしながらこの方法の適用が厳密で有効であるためには、とりあげられる研究者、哲学者、詩人の基本的立場と独自性についての十分な理解が大前提であり、それぞれの立場とベーム自身の立場との本質的な異同の厳密な検討と、さらにベームの特質を総合的にえがきだすために、それぞれの論点と概念の相互関連の十分な説明が必要である。このことを前提とすれば、筆者によるこの方法の適用について若干の問題点が指摘されよう。例えば、筆者はベルジャーエフの解釈の基本的立場について検討を加えることなく彼の解釈を認め、彼のいうドストエフスキーとベームとの関連と共通点をそのまま強調している。たしかに人間にまつわる積極的な悪の事実と、これからの救済の問題が両者に共通であるとしても、筆者自身いうように、ドストエフスキーが人間の心の奥底にみたものは突如と

して不合理な想念や行動を生む不気味な「深淵」Abgrundであって、バームのいう神自身の根底である「無底」Ungrundとは必ずしも同じとはいえず、両者の異同は厳密な検討を必要とする。ドイツ観念論の立場に立つシェリングと実践的な内面的神秘説の立場に立つバームとの関係についても同じことがいえる。共通点の指摘は思想の一側面の理解を助けるとはいえ、相違点の軽視は誤解を生むことが注意されてよいだろう。さらに四つの論点の相互関連の十分な説明がないために、バームの特質の輪郭が十分に鮮明でないことも惜しまれる。

しかしこれらの問題点も、もとより重大な欠陥ではなく、今後の筆者の研究の深化と、批判的検討の厳密化とによって十分補正されうるし、未開拓の対象についての本論文の貴重な意義と貢献とを損うものではない。

筆者の今後の研究に対して一言希望を述べるならば、バームの独自性といわれる、いわゆる「自然神秘説」の解明が残された一つの課題であろう。これを解決するには、バーム以前のドイツ神秘主義思想の系譜の追跡と研究が不可欠であって、これによってバームの全体像の完成が期待されよう。

以上により、本論文を文学博士の学位請求論文として十分な価値を有するものと判定する。